

蠅

横光利一

青空文庫

一

真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋いっぴぎの蠅だけは、薄暗い厩うまやの隅すみの蜘蛛くもの巣にひっかかると、後あと肢あしで網を跳ねつつ暫しばらくぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぼたりと落ちた。そうして、馬糞ばふんの重みに斜めに突き立っている藁わらの端から、裸体にされた馬の背中まで這はい上あがつた。

二

馬は一条の枯草を奥歯にひっ掛けたまま、猫背の老いた馭者の姿を捜している。

馭者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さして負け通した。

「何に？ 文句をいうな。もう一番じゃ。」
 すると、廂を脱れた日の光は、彼の腰から、円い荷物のような猫背の上へ乗りかかって来た。

三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が馳けつけた。彼女はこの朝早

く、街に務めて^{つと}いる息子から危篤の電報を受けとった。それから露に湿^{しめ}つた三里の山路^{やまみち}を馳け続けた。

「馬車はまだかかう？」

彼女は馭者部屋を覗^{のぞ}いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかかう？」

歪^{ゆが}んだ畳の上には湯飲みが一つ転つていて、中から酒色の番^{ばんち}茶^やがひとり静^{しずか}に流れていた。農婦はうろろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかかう？」

「先刻出ましたぞ。」

答えたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早はよ来ると良かったのじゃが、もう出ぬじやろか？」

農婦は性急な泣き声でそういう中に、早や泣き出した。が、涙も拭ふかず、往おうかん還かんの中央に突き立っていてから、街の方へすすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は将棋盤を見詰めたまま農婦にいった。農婦は歩みを停めると、くるりと向き返ってその淡い眉毛まゆげを吊り上げた。

「出るかの。直ぐ出るかの。悴せがれが死にかけておるのじゃが、間に合わせておくれかの？」

「桂馬けいまと来たな。」

「まあまあ嬉しや。街までどれほどかかるじやろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馭者はぽんと歩ふを打った。

「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたつぷりかかりますやろ。悴せが死にかけていますのじや、間に合せておくれかのう？」

四

野末の陽かげろう炎えんの中から、種たね蓮れん華げを叩く音が聞えて来る。若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけ

た。

「持とう。」

「何アに。」

「重たかろうが。」

若者は黙っていかにも軽そうな容ようす子を見せた。が、額ひたいから流れる汗は塩しお辛からかった。

「馬車はもう出たかしら。」と娘は眩つぶやいた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、

「ちよつと暑うなつたな、まだじやろう。」

二人は黙ってしまった。牛の鳴き声がした。

「知れたらどうしよう。」と娘はいうとちよつと泣きそうな顔を

した。

種蓮華を叩く音だけが、幽かすかに足音のように追つて来る。娘は後を向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持とう。もう肩が直なおつたえ。」

若者はやはり黙ってどしどしと歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」と呟いた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を曳ひかれた男の子が指を銜くわえて這はいつて来た。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳けて来た。そうして二間けんほど離れた場庭の中から馬を見ながら、

「こりやツ、こりやツ。」と叫んで片足で地を打った。

馬は首を擡もたげて耳を立てた。男の子は馬の真似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただやたらに馬の前で顔を顰しかめると、再び、「こりやツ、こりやツ。」と叫んで地を打った。

馬は槽おけの手蔓てづるに口をひっ掛けながら、またその中へ顔を隠して馬草まぐさを食った。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」

六

「おっと、待てよ。これは悴の下駄を買うのを忘れたぞ。あ奴は西瓜が好きじゃ。西瓜を買うと、俺もあ奴も好きじゃで両得じゃ

。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けた効あつて、昨夜漸く春蚕の仲間買で八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のために詰っている。けれども、昨夜銭湯へ行ったとき、八百円の札束を鞆に入れて、洗い場まで持つて這入って笑われた記憶については忘れていた。

農婦は場庭の床しょうぎ几こから立ち上ると、彼の傍そばへよつて来た。

「馬車はいつ出るのでござんしような。悴あせが死にかかっていますので、早はよ街へ行かんと死に目に逢あえまい思いましたな。」

「そりやいかん。」

「もう出るのでござんしような、もう出るつて、さつきいわしやつたがの。」

「さアて、何しておるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入つてきた。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊きき返かえした。

「出ませんの？」と娘はいった。

「もう二時間も待っていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。街へ着くと正午ひになりますやろか。」

「そりや正午や。」と田舎紳士は横からいった。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

という中うちにまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ馳けて行った。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじやろか？」

猫背の馭者は将棋盤を枕にして仰向きあおむになつたまま、簀すの子こを洗つている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸むさらんかいのう？」

七

馬車は何時いつになつたら出るのであろう。宿場に集つた人々の汗は乾いた。しかし、馬車は何時になつたら出るのであろう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出来るものがあつたとすれば、それは饅頭屋の竈かまどの中で、漸く脹ふくれ始めた饅頭であつた。何なぜかといえ、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰

も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手しよてをつけるということが、それほどの潔癖けつぺきから長い年月の間、独身で暮さねばならなかったという彼のその日その日の、最高の慰めとなっていたのであったから。

八

宿場の柱時計が十時を打った。饅頭屋の竈は湯気を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切った。馬は猫背の横で、水を充分飲み溜めた。ザク、ザク、ザク、ザク。

九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗つとくれやア。」と猫背はいった。

五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦の傍へ乗り始めた。猫背の馭者は、饅頭屋の簞の子の上で、綿のように脹らんでい
る饅頭を腹掛けの中へ押し込むと馭者台の上にその背を曲げた。
喇叭らっぱが鳴った。鞭むちが鳴った。

眼の大きなかの一疋の蠅は馬の腰の余肉あまじしの匂いの中から飛び

立った。そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命いのちをとり戻した身体を休めて、馬車と一緒に揺れていった。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑あずきばたけの横を通り、亜麻畑あまばたけと桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜った馬の額の汗に映って逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌じょうぜつが、早くも人々を五年以来

の知己ちぎにした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生々した眼で野の中を見続けた。

「お母ア、梨々。」

「ああ、梨々。」

馭者台では鞭むちが動き停った。農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

馭者台では喇叭が鳴らなくなつた。そうして、腹掛けの饅頭を、今やことごと尽く胃の腑ふの中へ落とし込んでしまつた馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大

きな蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光りを受けて真赤まっかに榮はえた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、そうして、馬車が高い崖路がけみちの高低でかたかたときしみ出す音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その馭者の居眠りを知っていた者は、僅わずかにただ蠅一足であるらしかった。蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下った半白の頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留とまって汗を舐なめた。

馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた眼匿めかくしの中の路に従って柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることは出来なかつた。一つの車輪が路から外はずれた。突然、馬は車体に引かれて突き立った。瞬間、蠅は

飛び上った。と、車体と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。そうして、人馬の悲鳴が高く一声発せられると、河原の上では、押し重なった人と馬と板片との塊りが、沈黙したまま動かなかつた。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

青空文庫情報

底本：「日輪・春は馬車に乗って 他八篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年8月17日第1刷発行

1997（平成9）年5月15日第23刷発行

入力：大野晋

校正：瀬戸さえ子

1999年7月9日公開

2003年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

蠅

横光利一

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>